

ケニアにおける英語教育事情

前ナイロビ日本人学校 教諭

長野県中野市立豊井小学校 教諭 山 岸 崇

キーワード：英語教育，現地教育，現地理解

1. はじめに

ケニアは、50あまりの部族が集まってできた、他民族国家である。キクユ族が22%，ルヒヤ族（ルイヤ族）が14%，ルオ族が13%，カレンジン族が12%，ほかにも、マサイ族，サンプル族，トゥルカナ族，ソマリ族などが住んでいる。また，人口比では少数派だが，イギリス系などの大土地所有者や，鉄道建設時に労働力を補い，のちに商人としてやってきたインド系も住んでいる。

それぞれの部族は，自分たちの言語，母語を持っている。バントゥー語系のキクユ語（話者数600万人），ルヒヤ語（400万人），カンバ語（300万人），キシイ語（100万人），メル語（100万人），ナイル語系のルオ語（350万人），カレンジン語（300万人）である。このほか，マサイ語，キプシギ語など42の言語が用いられている。

互いの部族同士がコミュニケーションをとるために，共通の言語，公用語が必要である。ケニアにおいて公用語として用いられているのが，スワヒリ語と英語である。

ケニアでは，多くの人々が共通語としてスワヒリ語を理解することができる。ケニア人同士の会話では，スワヒリ語を好む傾向がある。ただし，首都ナイロビで話されるスワヒリ語は標準スワヒリ語からはかなりかけ離れたものである。

ケニアで英語が公用語として使われるようになったのは，19世紀にケニア沿岸にイギリスが進出し，イギリス領東アフリカが誕生し，1888年には沿岸部が帝国イギリス東アフリカ会社（IBEA）により統治されるようになったからである。1902年，現在のケニア全域がイギリスの保護領となり，1920年には直轄のケニア植民地となる。こうして，イギリスの影響を大きく受けるようになり，言語でも英語が公用語として使われるようになった。

公用語が英語のため，看板，標識，新聞は，英語で書かれている。ナイロビなどの都市部の学校の授業は英語で行われるため，教育を受けた人は日常的に英語を話す。ロッジや土産物屋でも，普通に英語で話す。

2. ケニアの英語教科書の分析について

New Progressive PRIMARY ENGLISHという英語の教科書を1年生から8年生まで購入して分析した。この教科書は，ケニアの公立学校でよく使われている教科書である。

まず語彙について分析してみたところ，ケニアの小学校1・2・3年生は，身近な語彙が中心になっている。特に，名詞が多く見られる。日本の英語の教科書中学校1年生から2年生程度で新出される語彙である。英語検定で比較すると，5級～4級程度の語彙と言える。ケニアの小学校4・5年生は，日本の英語の教科書中学2年生の後半から3年生にかけて新出する語彙程度である。英語検定で考えると，3級～準2級程度の語彙レベルである。ケニアの小学校6・7・8年生は，日本の高校生，大学生レベルの語彙である。英語検定で比較すると，2級から準1級程度のレベルである。扱っている語彙の特徴としては，動物，植物，作物など頻繁に見られる。ケニアでは，動物，植物，作物は，生活する上で身近な存在であり，したがって，普段の生活で頻繁に使う語彙を中心に教科書で扱われているということが言えるだろう。また，犯罪に関する語彙，病気に関する語彙，災害に関する語彙などが，学年があがるにつれて出される傾向にある。これは，犯罪，病気，災害などが多いケニアならではの，それだけ普段の生活のなかで，必要な語彙であるということが言える。

Reading教材は，分量が豊富である。右の画像は，小学校2年生のUnit 26の教材である。3ページにわたって，物語が書かれている。物語の内容は，「3匹のやぎのガラガラドン」の話を，登場人物をケニアで馴染みがある

ヒョウとヤギに変えて、話を展開させている。これを、小学校2年生が読むのだから、レベルが高い。英語が読めるということ、かなり重視している。

もう一つ特徴は、Reading教材の内容に、道徳的価値観や社会スキルが盛り込まれていることである。8年生の教科書Unit 3のReading教材では、なぜ息子が麻薬中毒になってしまい、どのように育てるべきだったかについて書かれている。ケニアでは、麻薬の問題が、大きな社会問題になっている。それを、英語の教科書で扱うことで、子どもたちが適切に判断できるように促している。エイズについても、ケニアで大きな社会問題になっている。8年生（日本の中学2年生）でこのような問題を英語の教科書で扱うことで、問題解決に役立てようという意図が感じられる。英語の教科書は、単なる英語を学習する教科書だけではなく、英語を通して社会スキルを学習する、大事な機会になっている。



ケニアの公立学校の英語の教科書

ケニアで大きな社会問題になっている。8年生（日本の中学2年生）でこのような問題を英語の教科書で扱うことで、問題解決に役立てようという意図が感じられる。英語の教科書は、単なる英語を学習する教科書だけではなく、英語を通して社会スキルを学習する、大事な機会になっている。

3. 現地校の視察について

2012年10月30日（月）に、キリマニ校を訪問した。キリマニ校は、ナイロビのキリマニ地区に位置し、ケニアの公立学校である。キリマニ校は、ナイロビ日本人学校と毎年交流を重ねている。日本人学校の運動会に参加したり、学習発表会にケニアの歌や劇を発表したりしている。

今回、そのキリマニ校を訪問して、英語の授業を見せていただき、キリマニ校のカリキュラムについて調べた。

(1) キリマニ校のカリキュラム

まず、ケニアの公立学校では、どのような教科が教えられているのか調べた。右図のとおりである。日本と大きく異なることは、国語がスワヒリ語であること。日本の道徳にあたるのが、ライフスキルと宗教教育という教科であることである。

ケニアの教科	日本語の意味	ケニアの教科	日本語の意味
English	英語	Math	算数・数学
KISW	スワヒリ語	S/ST	社会
Science	理科	L・SE	ライフスキル
P.E.	体育	CRE	宗教教育
C.A.	図工・美術	Lib	図書館

続けて、1日のスケジュールがどのようになっているのか調査した。

特徴としては、1時間の学習時間が35分と、日本より若干短い。1日は、8時間授業までである。休憩を午前中2回もとっている。ケニアの学校では、家からスナック等を持ってきて、休憩時間にスナックを食べるのが一般的である。8時間目が終わったあとの時間が興味深い。Remedialとは、補習の時間である。理解していない児童生徒に対して、8時間目以降に補習を行って、理解を補っていくそうである。Gamesは、日本のクラブ活動のようなものである。Cleaningは清掃である。

時間	
朝の会	～8:20
1校時	8:20～8:55
2校時	8:55～9:30
休憩	9:30～9:50
3校時	9:50～10:25
4校時	10:25～11:00
休憩	11:00～11:30
5校時	11:30～12:05
6校時	12:05～12:40
昼食	12:40～14:00
7校時	14:00～14:35
8校時	14:35～15:10
Remedial/Games/ Cleaning	15:10～17:00

(2) キリマニ校の言語カリキュラム

キリマニ校では、言語の時間はどの程度設定されているのかについて調べた。

英語の時間が、毎日設定されていることが分かった。7年生・8年生は、週に210分英語を学習していることになる。日本の中学生は、50分×4時間なので、週に200分英語を学習している。時間的には、ほぼ同じと言える。日本の英語学習と大きく異なる点は、小学校1年生から英語学習が始まるということだ。日本では、新学習指導要領で、ようやく小学校5年生から

外国語活動が開始されるようになった。ケニアでは、幼稚園から英語の学習がスタートしているため、英語学習を開始する年齢に大きな違いが見られる。

学年	英 語	スワヒリ語
Primary 1	5時間 (35分×5)	4時間 (35分×4)
2	5時間 (35分×5)	4時間 (35分×4)
3	5時間 (35分×5)	4時間 (35分×4)
4	5時間 (35分×5)	4時間 (35分×4)
5	5時間 (35分×5)	4時間 (35分×4)
6	5時間 (35分×5)	4時間 (35分×4)
7	6時間 (35分×6)	5時間 (35分×5)
8	6時間 (35分×6)	5時間 (35分×5)

(3) キリマニ校の英語の授業について

まず、Pre schoolの英語の授業を見せていただいた。Pre schoolとは、日本の幼稚園にあたる場所で、5歳児～6歳児の子どもたちが在籍している。公立の小学校に併設されていることが多く、そこで子どもたちは小学生と同じように学習している。

英語の学習時間は、小学校より5分短い30分であった。学習内容は、フォニックスを中心とした音の指導であった。見せていただいた授業は、aの音についての指導であった。aを使った単語を言ったり、書いたり、粘土でaを含んだ単語を作ったりしていた。このくらいの年齢からも、どんどん英語を書かせることに驚いた。音声中心としながらも、書く事に抵抗は見られなかった。また、粘土を使うことは、このくらいの年齢の子どもたちに手先の訓練も兼ねているとのことであった。学齢に合わせて工夫をしていることに驚いた。

次に、小学校5年生と4年生の英語の授業を見せていただいた。この日の授業は、文法の授業であった。nounとverbとadverbの違いについて確認し、それを使った例文を作っていくという授業であった。

児童の英語力の高さに驚いた。当たり前であるが、オールイングリッシュの先生の指導に、児童は積極的に答えていた。学習への動機付けもかなり高い。

児童のノートを見せてもらったが、まとまった英語が書かれていた。これだけの英語を書くには、かなりの英語力が必要である。また、使っている英語の語彙も大変豊富である。

4年生の授業では、英語に続いて理科の授業も見せていただいた。理科の内容であるが、すべて英語を使って授業を行っていた。キリマニ校の児童にとって、英語は学習言語であり、これを学習しないと、すべての学習が成立しないのである。

4. まとめ

ケニアは、英語教育先進国である。イギリスの植民地になって以降、さかんに英語教育が行われてきた。歴史的に考えても、日本の英語教育より古い。

ケニアの英語教育を考えた時、児童生徒の英語学習に対する動機付けが、非常に強いということが言える。多くの部族が共に暮らすケニアにおいては、共通語として英語が果たす役割が大きい。児童生徒は、暮らしの中で英語を使う必然性が非常に高い。英語を使う必然性が高ければ、英語を学習する動機付けも当然高くなる。



キリマニ校の授業の様子

日本の児童生徒にもケニアの児童生徒と同じような英語学習に対する動機付けがあれば、児童生徒の英語学習に対する意欲も高まるであろう。

日本の英語学習においても、実際にスカイプを使って国連職員と英語でやりとりをしたり、海外の学校と英語でやりとりしたりすることは可能である。ALTが配属されている中学校も数多くある。ALTの存在をフルに活用して、英語学習の動機付けを高めていく方法も有効である。もう1点、私が提案したいのは、テレビに英語放送を入れてほしい。NHKワールドなどを、地上波で見ることができると、それだけで日本の児童生徒には英語が身近になり、英語学習の動機付けになると思う。

ケニアのキリマニ校の見学から感じたことは、英語学習のスタートの学齢は早い方が良いということである。保育園児や幼稚園児から自然に英語に触れる。小さい子は、言語に対して抵抗感がなく、習得も文法や発音を意

識せずに、自然に行われているように思う。英語の習得率と英語に触れている時間は、比例の関係にあるように思う。小さい時から、英語に触れ、なるべく多くの時間英語に触れることで、英語の習得率が高まるであろう。日本では、日本語力が落ちるからと批判的な意見も聞かれるが、日本語も英語も共に学習時間を確保していくことが、両方の言語を習得することにつながる。

私がケニアに滞在している3年の間に、日本の大手商社がナイロビに事務所を構えて活動を拡大した。ケニア国内の車種は、日本の企業がNo.1である。その一方で、中国企業が道路工事でケニア初のスーパーハイウェイを建設したり、携帯電話や電気事業で韓国企業のシェアが高かったり、日本の企業と海外の企業との競争も激化してきている。これからの国際社会の競争で、日本が生き残っていくためには、海外で活躍する若者を一人でも多く育て、日本の高い技術で生産した商品に付加価値をつけて輸出していかなければならない。英語ができるのは当たり前のことで、英語で何ができるかということを探求していかなければならない時代であることを痛感した。